

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2020 石井剛

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

2020年度Sセメスター学術フロンティア講義

30年後の世界へ——「世界」と「人間」を共に考える 「中国」と「世界」: どこにあるのか

石井剛(地域文化研究専攻/中国語部会、東アジア藝文書院)



「中国」は
どこにあるのか

我々がもっとも恥ずかしく思うのは、何と
いっても我が国に国名がないということ
である。ふだん呼び習わしている「諸夏」とい
い、「漢人」といい、「唐人」といい、これら
はいずれも王朝の名前である。外国人がいう
「震旦」と「支那」はどちらも我々が自分で命
名したものではない。「夏」「漢」「唐」など
で我々の歴史を名づければ、国民を尊重する
という宗旨にもとる。「震旦」や「支那」など
で我々の歴史を名づければ、名は主人に従う
ものという原則を失ってしまう。「中国」「中
華」と言ってしまうと、やはりどうしても自
尊心が強くうめぼれているということになり
、周りから批判を招くだろう。しかし、一つ
の王朝によってわが国民を辱めてはならない
し、外国人が勝手に決めたことでわが国民を
愚弄するのはなおさら駄目である。三者共に
欠点があるなかで、本当にやむを得ず、やは
り我々の言い慣れていることばを使い、中国
史と呼ぶのである。

——「中国史叙論」



梁啓超 (Liang Qichao, 1873–1929)

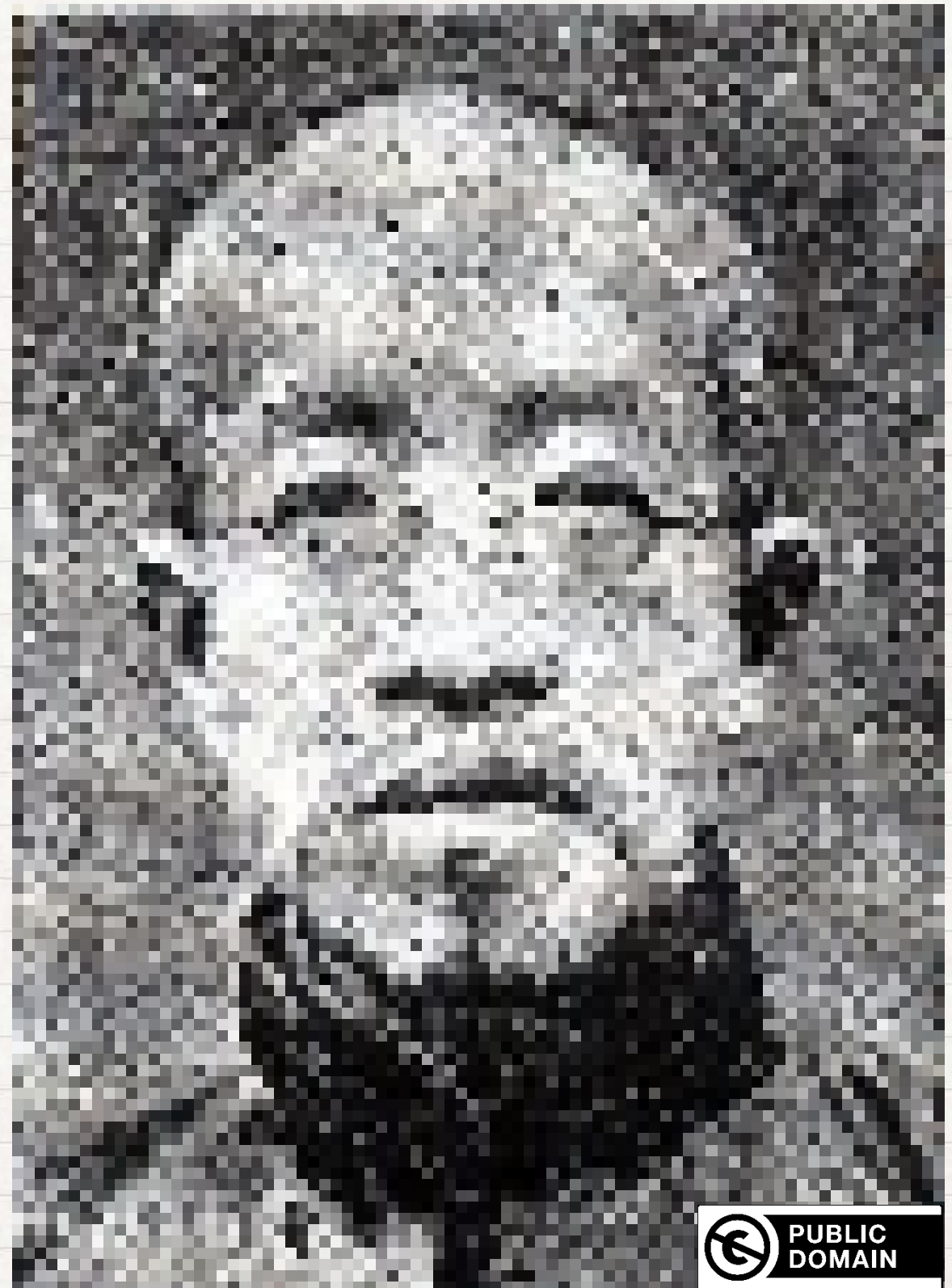
中

華民国の経営範囲というこ
とで言うならば、ベトナム
と朝鮮の二郡は必ずや回復

すべきものであり、ミャンマーの一司がそれに次ぐ。チベット、ウイグル、モンゴルの三辺境はその去留に任せる。だが、ものごとには難しいことと容易なことがあり、迂回すればうまくいくが、まっすぐ進めることはできない。

（中略）今日、中華民国はおそらく前漢の旧領域を回復することはできないだろう。明代の直轄省（ミャンマーを除く）を根本とするべきだ。（中略）三辺境は故地ではないけれど、他に属しているわけでもないのだから、形勢に従って導いていけば、二郡一司よりも容易だろう。

——「中華民国解」



PUBLIC
DOMAIN

章炳麟 (Zhang Binglin, 1869–1936)

『大同書』

大 道之行也，天下為公。
選賢與能，講信脩睦。
故人不獨親其親，不獨
子其子；使老有所終，壯有所用，
幼有所長；矜寡孤獨廢疾者，皆有所
養；男有分，女有歸；貨惡其弃
於地也，不必藏於己；力惡其不出
於身也，不必為己。是故謀閉而不
興，盜竊亂賊而不作，故外戶而不
閉。是謂大同。

（《禮記》禮運）



康有為 (Kang Youwei, 1858–1927)

葛兆光 (GE ZHAOGUANG)

「何が中国か？」の思想史 (『思想』2018年第6号)

1. 私は、中国は歴史的過程の中で形成され、歴史上の領域は不断に移動してきたことを強調いたします。我々は現在の中国の領土とエスニック・グループをもって歴史を遡って現代中国のすべてのエスニック・グループ、領域と歴史を歴史上の中国のものとしてはならないことを強調します。
2. 私は、秦漢以来中国は中核的区域の政治的区域、行政制度と、非常に強大な文化的伝統を形成し、華夏観念、内外観念、さら非常に強大な中国の歴史的意識を形成してきたことも強調します。
3. この中核的区域における「中国」も混合したものであり、それと王朝はかならずしも一致しないことを認めるべきです。本来のエスニックグループ、政治、文化は積み重ねられて凝固するといったことを何度も繰り返した過程の結果で、言葉を換えればエスニックグループと文化が「南下、そして南下」して完成していったものです。
4. 清代以降、中国は伝統国家から近代国家へと転換したのですが、この転換はかなり困難、かつ特殊なものでした。
5. 近代国家であり天下の帝国という複雑な性格を併せもつ現代中国は、当面の国際秩序の中で多くのトラブルに直面しています。これらのトラブルをどう処理するかには政治家の高度の智慧が必要です。これは歴史研究者が解決できることではありません。

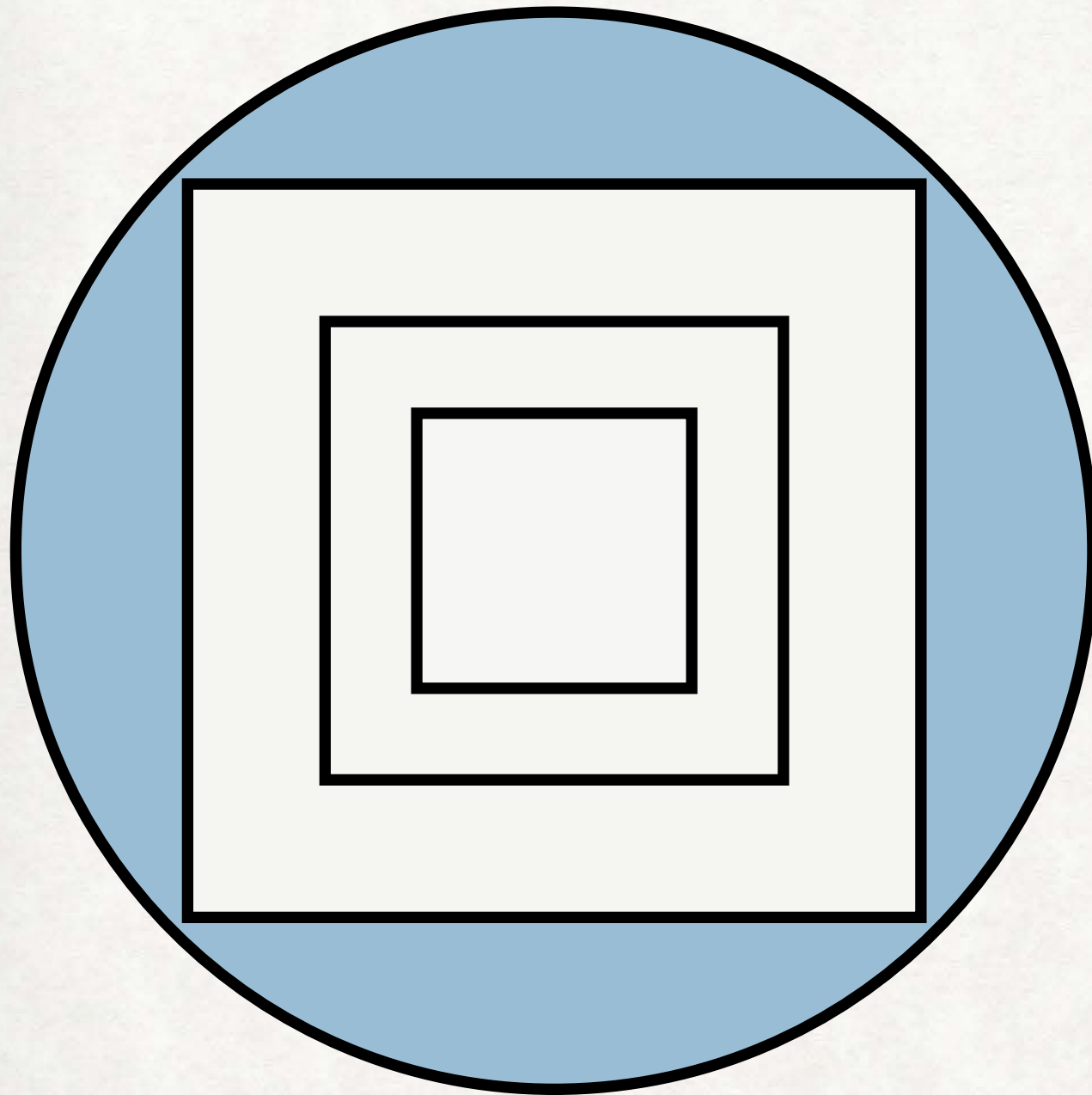
「天下」

“溥天之下，莫非王土；率土之濱，莫非王臣。”

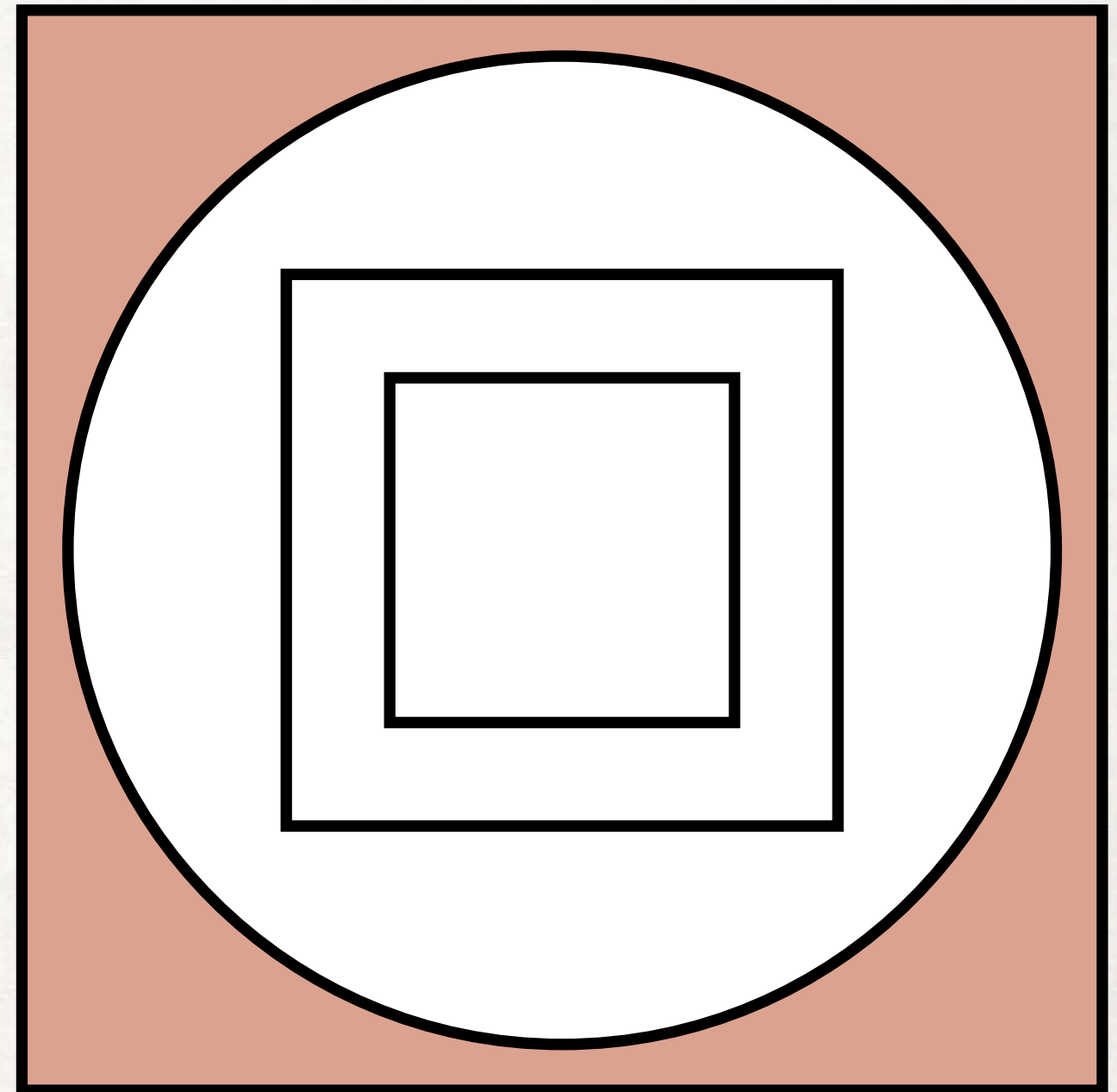
— 《詩經》 小雅·北山

天円地方

古代中国における世界イメージ



A



B

葛兆光『中国再考』（岩波書店、2014年）から

趙汀陽(ZHAO TINGYANG)

中国社会科学院哲学研究所



下システム論

(1)地理学的には、天下は「天の下にあるあらゆる土地、すなわち世界」を指す。

(2)社会心理学的には、天下は世界の人々全員による共通の選択、すなわち「民心」を指す。

(3)政治学的には、天下は「世界政治」の制度を指す。



下構造を内に含む中国

(1)世界的な「外なき」天下は、世界すべてを含みこみうる世界的政治秩序。

(2)夏商周三代の歴史は「世界史」、周朝は「天下」を確立。

(3)秦以降の「大一統」は「中国の世界史」から「中国の国家史」の始まり。

「渦巻きモデル」の中国

“漩渦模式”



巻きがひとたび形成されると、求心力と自己増強力に抗うことはできず、それに組み込まれると抜け出すことが難しいばかりか、抜け出したくないという願望も生じ、その結果、巨大な渦巻きが形成され、中国という存在の規模と実質がそれによって規定される。

- 歴史哲学としての中国：「存在being」というよりも「変在becoming」。
- 帝國的性質：国境boundaryはなく、辺境frontierのみがある。
- 万民国家inclusive state：中国は「天下の縮図（microcosm）」であり、国民国家nation stateではなく、inclusive stateである。

“「中国」とは、中国を中国たらしめる運動体である”

— 川島真『中国のフロンティア』（岩波書店、2017年）

「世界制度」は いかに想像されるか

“

世界史は疑わしい概念だ。人類はまだ「世界を世界とする」には至っていない。だから、世界としての世界はまだ存在していないのだ。こういう状況のもとでは、世界史はミスリーディングな虚構である。

— 趙汀陽『天下の今日性』（2016年）

イマニュエル・カント(1724–1804)

永遠平和 のために



趙汀陽氏の想像

「天下システム」

- 天下概念の根本的な意味は、それが「外なき」世界である、つまり、**内部のみからなり、外部をもたない世界**であるということ、これこそは普遍的秩序が成立するための存在論的条件となる。
- 天下システムが将来もし可能になるとするなら、基礎になるのはおそらく**グローバル金融システム、グローバルテクノロジーシステム、インターネットのように真の意味で実効的な力をもっている機構や組織**だろう。あるいは、グローバル金融システム、グローバルテクノロジーシステム、インターネットを世界的にシェアしながら共有し共同管理するようなグローバルシステムこそが天下システムの重要な条件となる。

幸福な監視国家？

梶谷 懐・谷口 康太『幸福な監視国家・中国』（NHK出版、2019年）

- 全体的に、経済成長率の高い新興国ではテクノロジーの肯定感も強い傾向があるとはいえ、中国におけるテクノロジーへの信頼性、およびそこから生まれる未来の社会に対する楽観的な姿勢（「テクノロジカル・ユーフォリア」）は、世界の主要国の中では群を抜いていると言えるでしょう。
- 現代の中国において、テクノロジーの急速な発展とそれを使いこなす高い「人格」を兼ね備えた主体としての共産党の権威の強化、さらにはその権威を付与する儒教的価値観の強調という現象が起こっているのは、ある意味では当然のことのように思えます。すなわち、そういった現象は、決して中国で孤立して起こっているのではなく、テクノロジーと人間社会の在り方をめぐる世界的な動きとシンクロしつつ生じていると考えられるからです。

監視による幸福？

大屋雄裕『自由か、さもなくば幸福か？』（筑摩書房、2018年）

- 社会を構成する全員が平等に監視の対象となるミラーハウス社会は、もちろん理想的なものとは言えないだろう。しかしすでに述べたように、少なくともそれは偏らない取り扱いという一応の正義にかなったものであるし、そのなかで各個人は（社会のルールに抵触しない範囲で）それぞれの生き方を追求する自由を保障されているし、自己の人生に対する暴力的な侵害が防がれるだろうという信頼を持つことができる。これは次善の選択肢として、あるいは少なくとも受忍可能な状態として、積極的に評価し得るのものではないだろうか。
- ハイパー・パノプティコン

SOCIETY 5.0

人間中心のテクノロジー社会

「我々が目指すべき未来社会の姿であるSociety 5.0は、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させることにより、地域、年齢、性別、言語等による格差なく、多様なニーズ、潜在的なニーズにきめ細かに対応したモノやサービスを提供することで経済的发展と社会的課題の解決を両立し、人々が快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることができる、人間中心の社会である。」（内閣府・科学技術イノベーション総合戦略2017 <https://www8.cao.go.jp/cstp/sogosenryaku/2017/honbun2017.pdf>）

サイバー空間とフィジカル空間

日立東大ラボ『SOCIETY 5.0 人間中心の超スマート社会』（日経新聞社、2018年）

- “Society 5.0”においてサイバー空間というとき、それは単に大量のデータをやり取りする空間のことではなく、問題の分析や問題の解決策の立案のために実社会のモデルが計算機の中につくられていく空間という意味も含まれる。実社会から集めたデータを分析する際には、あたかも現実を鏡に映したかのような現実と同じ構造が計算機の中に必要なのである。
- サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）が融合すると、フィジカル空間（現実世界）からサイバー空間へのデータの流れと、サイバー空間からフィジカル空間（現実世界）への情報の流れがスムーズに行われ、これらがサイクルとして繰り返されるようになる。これまで単独に制御されていた電力システムや鉄道システムのようなフィジカルなモノを動かしてきた個々のシステムは、サイバー空間で相互につながり、これまでにない高度なサービスや新たな価値を実社会に生みだすようになる。

「人間中心の社会」とは何か？

エアコンを例にすると、経済発展のためには、オフィスや工場を快適なく室温に保つことも必要だろう。しかし、化石燃料で発電していると、温室効果ガスの排出によって地球温暖化という社会問題が生まれる。建物内という限られた空間を快適にすることに目だけを向けるだけではなく、社会全体が抱える問題や地球環境に及ぼす影響にも目を向けなければならない。（中略）この難しい課題に挑むのが“Society 5.0”である。

システム化権力と「天下」

システム化した物質世界が自動的に「天下」になるはずはない。グローバル化した世界には天下的精神性がまだ備わっておらず、利己的なシステム化権力は利益を共に享受するような世界制度を打ち立てることがないからだ。あらゆる人に属する世界は、世界理念にしたがって生み出されるべきであり、世界理念とは「天下を以て天下とする」という管子の原則や、「天下を以て天下を観る」という老子の原則である。こうした世界理念は明らかにシステム化した新しい権力が求めているものではない。グローバル資本、技術、サービスが三位一体となったシステム化権力は、主権国家とは異なる新しい政治的主体ではあるが、なおも自らの利益と権力の極大化だけを求めている。それは新しい専制世界の統治者たろうとしているのであり、世界の共通利益の庇護者になるわけではないのだ。そのポテンシャルは近代帝国主義よりも危険だ。

天下システムの意義

システム化した新権力によるテクノロジーの専制はまだ先のことであろうから、より切迫した危険は、今なお覇権的地位を保っている帝国主義がテクノロジーの発展にも大きな関心を示しており、それによって覇権を維持しようとしていることだ。リスク測定不能のテクノロジーを発展させることは実は合理的な行為ではないのに、こうした非合理的な行為が世界を支配する最大の権力に由来している。だから、国際組織に国家権力やシステム化した権力によるあらゆる非合理的行為を阻止するよう望んでも無駄である。国家システムよりもハイレベルの世界普遍秩序を構築することだけが、帝国主義的覇権とグローバルなシステム化新権力を牽制できる。そうしてこそ、世界はがんじがらめの技術専制からのがれ、狂ったように滅びていくことから逃れられる。新天下システムの意義はまさにここにあるのだ。

わたしたちはどのような
「世界」を想像すべきか？

なぜ世界は存在しないのか

マルクス・ガブリエル

世界は、あらゆるものを包含する一個の対象領域でも、あらゆることがらを包含する一個の事実領域でもなく、私の言い方では「あらゆる意味の場からなる意味の場」として理解すべきである。

人間精神と歴史

マルクス・ガブリエル『「私」は脳ではない』（講談社、2019年）

- 人間の精神は、自分自身のイメージを作り出し、それによって精神にとっての現実を多数生み出します。
- 私たちには誤った世界観や自己イメージも描き出す能力があるため、イデオロギーが生まれてしまいます。
- 人間の精神は、これら自己イメージの根底にある物ではありません。（中略）人間の精神は、自己イメージの中にのみ存在します。そうして人間の精神は、常に自分のイメージするものになります。だからこそ、人間の精神には歴史——精神史——があるのです。

「世界」と「人間」の未来 を振り返りながら想像する ための中国研究

参考文献

- ・ 梁啓超「中国史叙論」、村田雄二郎責任編集『新編 原典中国近代思想史第3巻 民族と国家——辛亥革命』、岩波書店、2010年
- ・ 章炳麟「中華民国解」、村田雄二郎責任編集『新編 原典中国近代思想史第3巻 民族と国家——辛亥革命』、岩波書店、2010年
- ・ 葛兆光「何が中国か？」の思想史、『思想』2018年第6号
- ・ 葛兆光『中国再考』、岩波書店、2014年
- ・ 赵汀阳《天下的当代性》，中信出版社，2016年
- ・ 赵汀阳《惠此中国》，中信出版社，2016年
- ・ 大屋雄裕『自由か、さもなくば幸福か？』、筑摩書房、2018年
- ・ 梶谷懐・谷口康太『幸福な監視国家・中国』、NHK出版、2019年
- ・ マルクス・ガブリエル『新実存主義』、岩波書店、2020年
- ・ マルクス・ガブリエル『「私」は脳ではない』、講談社、2019年
- ・ マルクス・ガブリエル『世界はなぜ存在しないのか』、講談社、2018年
- ・ 川島真『中国のフロンティア』、岩波書店、2017年
- ・ エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、中央公論社、1974年